

歴史は未来の羅針盤

温故知新

今回は、近江日野商人館からお届けします。商人館では、創立三〇周年記念の企画展用の資料として、「明治時代から戦前までの日野地方の町や村の様子」を写した写真や絵はがきを探しています。ご協力いただける方は、近江日野商人館までご連絡ください。

伊賀上野地震で 日野地方も被害甚大

三月に発生した東日本大震災では、想像を絶する甚大な被害がもたらされました。

かつて、日野地方に大きな被害を与えた地震としては、伊賀上野地震があり、東日本大震災の発生をきっかけに、近江日野商人館では、「近江日野における伊賀上野地震の被害記録」を展示しています。その様子を少しばかり紹介します。

嘉永七（一八五四）年六月十五日（新暦七月九日）に、伊賀上野地方（三重県）を震源とするマグニチュード七・三の直下型地震が発生しました。先般の阪神大震災と同程度の地震で、三重・奈良・滋賀・京都方面を中心に大きな被害が発生しました。



▲倒壊して欠けた石灯籠
(八阪神社・鎌掛)

は南海地震が発生し、大きな被害が出ています。

伊賀上野地震は、人々が熟睡中の午前二時頃に発生しました。

その被害の様子を、日野地方の人々が日記などに書き留めています。情報伝達手段が発達していなかった当時において、時間の経過とともに次第に情報もたらされ、日記の記述にも、詳しい追加情報が次々と記されています。

村井町の庄屋であった辻六右衛門の六月十五日の日記には、その被害の様子を、「寺々町々在々の建物、倒れるもの著し。村井町に倒れ家三十六軒、死人八人あり」と記され、鎌掛村の庄屋記録では、

「民家や蔵が移動して動き、倒壊した家が村内で七十八軒。両神社は大荒れにて灯籠は残らず倒れ、鳥居は崩れ落ちてゐる」。また西大路藩の医者「森島永代日記」には、「この地震による破損は数知れず、家が倒れ、蔵が倒れ、塀や灯籠がすべて倒れている。町々では家ごとに仮屋を建てて寝食しており、誠にあさましき有様である」と日野地方の惨状を記しています。

「森島永代日記」の以後の記録には、「寺々の釣鐘堂が数多く倒れ、本堂も大破している。南蔵王村や北畑村は大破損、熊野村や西明寺村では灰小屋が倒れて出火。日野町のけが人百十人、即死二十人と聞き及ぶ」。竜王山や北畑村では二つに離れる所があり、石子山では大石が四つ、五つ落ちたと追加情報を伝えています。

そして、七月十一日の記録として「今回の地震により日野町では三百軒あまりの家が倒れてしま

い、破損した家の数は数知れない。この年の地震により、所々の井戸水も温かくなった」と記しています。

「森島永代日記」では、本震後の余震（有感）も数多く記しており、余震記録は、嘉永七年六月は十五日分、同七月は二十八日分、八月は二十日分、九月は二十一日分、十月は十七日分が記され、十一月には四日に安政東海地震が、五日に安政南海地震が発生したため、この両地震の余震と区別できなくなりませんが、以後、安政三（一八五六）年九月八日まで、合計百八十三日分の余震記録が記されています。

地震予知連絡会では、今後三十年間に伊賀上野地震が再発する確率はほぼ0%と判定していますが、東海地震や南海地震は発生確率が高いとされています。伊賀上野地震の貴重な記録を、今後の防災に生かしていく必要があります。



▲倒壊後、再利用された鳥居
(八幡神社・北畑)